

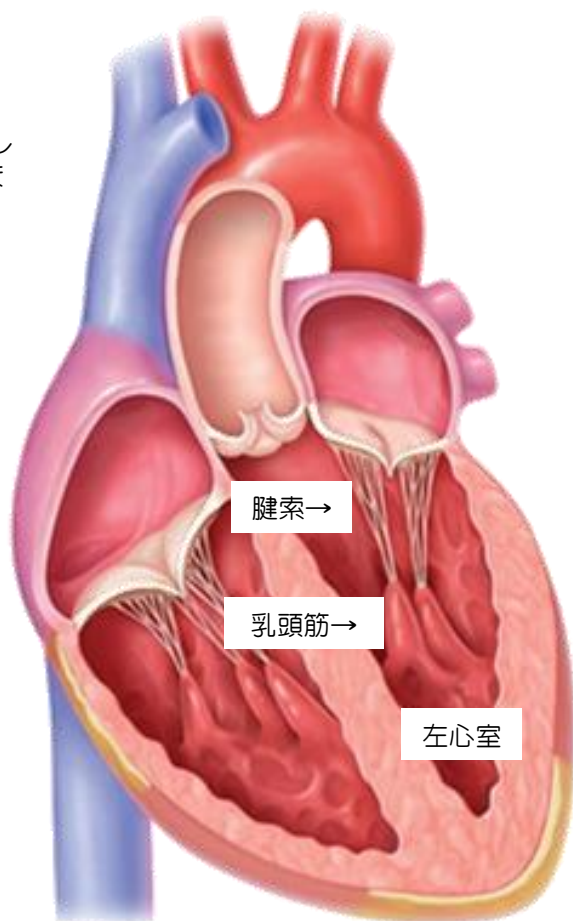
# 拘束型心筋症（RCM）とは

左心室では、乳頭筋と僧帽弁の間を腱索というパラシュートの紐のようなもので支え、正常な動きをサポートしています。拘束型心筋症では心筋壁や乳頭筋、腱索が繊維化（異常増殖）して固くなることで心室の動きが障害されて循環不全を起こします。

## 《症状》

初期ではこれといった症状はありません。徐々に左心室が固くなり、拡張が阻害されることで手前の左心房で血液が滞り、以下のような症状がみられることがあります。

- 疲れやすい
- 運動後や興奮時に呼吸が悪くなる。
- 肺水腫
- 足が急に動かなくなる（**血栓塞栓症↓**）
- 胸水貯留



## 《治療》

### ◆ 内科治療

残念ながら心筋や腱索の繊維化を防ぐお薬がありません。根本的な治療が無いため、心臓の動きをサポートしたり、対症療法が中心となります。

- 強心剤（心臓の動きをサポートする）
  - 利尿剤（肺水腫の治療・発症予防）
  - 抗血栓剤（血栓塞栓症の予防）
- などで治療を行います。

### ◆ 酸素吸入（肺水腫時）

肺水腫を起こしてしまうと、一度治療をして肺水腫が良くなっても、再発する可能性が高いです。通常空気中の酸素濃度は21%ですが、酸素濃縮器を用いて酸素濃度を40%程度にした入院室が酸素室です。酸素室内で安静にしてもらいます。

場合によってはレンタル酸素室をご自宅に設置してもらい、在宅で治療を行うこともあります。

## 《肺水腫の早期発見》

肺水腫は非常に危険です。発見が遅れると咯血を起こして亡くなってしまうこともあります。心疾患を持つ子では、日ごろから睡眠時の呼吸回数を数えて記録しておくことで早期発見につながります。**大人しく眠っている時に、「吸って吐いて」を1回とカウントしてみましょう。（15秒の測定でもOKです）**正常では1分間に30回未満ですが、通常時より10回以上多かったり、40回/分以上の呼吸である場合は肺水腫を起こしている可能性がありますのですぐにご連絡ください。